

八 関東地方委員会

中執は関東地方委員会の設置を決定して、地方委員に梅本英三、田所茂雄、伊藤悦太郎を任命し、三井利員を書記とした。私はこの委員会と中執との連絡をとることになり、入江は組織局責任者として随時出席することにした。梅本らには入江と私とが中執だということは知らなかった。全員が関東地方委員だと思っていただろうと思う。このような構成にしたために、次第に関東地方委員会が党中央の政治活動、組織活動を実質的に代行するような形になって行くのであった。

党中央は関東地方委員会のために四谷にアパートの一室を借りた。そして入江が其処に住んだ。一九三四年九月に第一回の委員会を開いて、労働第一部 梅本英三、労働第二部 田所茂雄、農民部と殖民地部 伊藤悦太郎という分担をきめた。労働第一部は全国自連とその組織下の組合、労働第二部は他系統の組合、農民部は「闘う農民」を通じて農村へ働きかけることとし、殖民地部は朝鮮東興労働組合その他の朝鮮人労働組合に組織を拡大することを任務とすることにしたのである。委員会は週一回定例会議を開いて活動方針を決定すると共に、組合の会合の前には必ず委員会を持って、その会議に提出される問題を討議し、方針を決定し、極力この決定を組

合の決定とするように細部に亘って打ち合せすることにした。こうしてアナキズム系労働組合に極秘の形で党の影響を強めていったのである。そして黨員は次第に増加した。^(注17)

しかし労働第二部が担当していた他系統の労働組合への働きかけは極めて困難な仕事だった。当時、田所は江東地区の労働組合会議の書記になっていたので、いわゆる合法左翼と呼ばれた組合が組織されている工場の労働者に働きかけ、争議の煽動を通じて党組織の拡大を計画して活動していた。全協のオルグも此処に拠点をつくろうとしていたので、彼は連絡をつけて共同戦線を張っていた。

「全協の奴はひどくビクビクしている。連絡員がすぐ変るので計画が中断したり、喰い違ったりしてやりにくい。その上彼らは共産主義理論や共産党の方針を持っているが、こちらには何もないのでやりにくい。彼らを説得し得るような党の理論や方針を説明したパンフレットが必要だ。パンフレットを作れと中央へ要求してくれ」と言いだした。

関東地方委員会の要請によって、中執は党の行動綱領を説明した文書を作るようになった。これが「自由連合新聞」第九五号に発表した「一九三五、六年の危機に対する我等の態度」という論文である。このなかで党の行動綱領を発表した。これが党の正式文書としては最初の論文であった。自由連合新聞を党の準機関紙と決定したのはこの頃であった。正式の機関紙は別に発行することになっていたが、遂に発行出来ずに終わった。

田所はこれだけでは充分とは言えない。もっと系統的に党の理論を解明した文書を作るべきだと主張した。彼は全協の組合員と理論闘争していたので、それは実践的要求であったのである。中執は関東地方委員会の要求を容れて、文書作成を決定した。こうして党中央部第一号パンフレットを発行することになった。

このようにして、資金活動以外の党活動の中心は、次第に関東地方委員会に実質的には傾いて行った。そしてこの活動がなかったなら、党はブランキ主義的なテロリスト集団に終わったであろう。そして旧来の小結社、小グループと同一のものに終わったであろう。正しかったか、否かの批判は批判として、党はこの時代のアナキズム運動の中核となっていた。

一九三三年に多くのアナキスト詩人、作家、評論家によって『解放文化連盟』という組織がつけられていた。小野十三郎、岡本潤、秋山清、植村諦聞、伊藤和、木原実、尾村幸三郎、清水清らの名を思い出すことができる。無組織、無計画を強調していた純正アナキストは、前に述べたように組織は権力であるとして、如何なる組織にも反対していたが、それが如何にこの状況のなかでは無力であるかという反省が、行動として文化運動のなかで、最初の動きを見せたことは示唆的であった。重加する経済的政治的圧迫は次第に同人誌という形の小雑誌、小新聞を押しつぶして来たが、発表の機関を持たない文化運動は無に近いくから、力を合わせねばならぬとの反省がいち早く生れたのであろう。この解放文化連盟員のなかから党員を獲得しようということは幾度も

中執で話し合ったが、その都度植村は、この連盟のことは自分にまかしておいてくれと言った。勿論それに誰も異議はなかったから植村に一任ということになっていた。

ところが梅本も伊藤も田所も植村が委員長であることはもちろん、党員であることも知らなかったから、解放文化連盟員のなかから党員を獲得しようと言いだして、しきりに人選をはじめたのである。そのうちに植村の名が出て、三人の間でいろいろ論評がはじまった時、入江は苦笑を浮べて私の顔を見た。その顔が今でも目に浮ぶのである。

「植村にはオレが話す」と入江が言ったのでそれ以後は植村の名は出なくなった。そしてそれまでは文化連盟関係は関東地方委員会からはずしてあったが、この時から伊藤が担当することになった。「文化運動は苦手だ」と言いながらも、彼は引き受けたのである。

翌年の一月、新宿の東京バンで中執を開いた。中執といういかめしいが、四人集まってコーヒーを飲みながら話し合ったのである。入江はしきりに自分を大阪へ行かしてくれと言いだした。そこでオルグとして派遣することにした。彼の任務は関西地方委員会を組織することだった。そして組織局責任者は私が引き受けた。私は前に大阪へ行って、逸見吉三と佐竹良雄には打診していたが、その時佐竹ははっきりと反対したが、逸見は反対しなかった。逸見に連絡をとったらいだらうという意見を述べた。

彼は大阪へ行くと、すぐ逸見に会った。逸見は革命団体が必要だという意見には反対しなかつ

たが、それが中央集権組織をとるべきだという意見には反対を表明したので、入江は彼に入党を勧めなかった。入江は韓国東と支岐義雄を入党させて、関西地方委員会準備会をつくった。こうして大阪、神戸在住のアナキストに働きかけていたが、成果があがる前に病気になるって沼津に帰って来た。それ以来、中執との連絡は中断した。

入江が大阪を退去してからは、中執は韓国東と連絡をとってはいいたが、組織の伸長は見られなかった。

農民部担当の伊藤は長野の南沢製炭松や、鷹野原長義らと連絡をとって、長野地方委員会を組織しようとして活動した。この組織活動の必要から『日本農業の諸状況^(注18)』というパンフレットを発行したのであって、積極的に宣伝活動をはじめようとしていた矢先に党は潰滅したのである。

九 党の発行した文書

党は最後まで正式機関紙を持つに至らなかったことは、前に述べた。「自由連合新聞」を党の準機関紙と定めたが、あくまでも党が内部的に定めたことで、外部へ発表した訳ではなかったから知られてはいなかった。中執と編集に加わっていた梅本、伊藤の他は誰も知らなかった筈である。発行人の山口にも知らなかった。発行費については党が新聞に支出した金だけでは足りな

かったので、山口の努力に負うところが大きかった。

「自由連合新聞」を全国自連の機関紙からアナキズム運動全般に亘る宣伝煽動のための新聞に改めたのは、一九三三年一月であったことは既に述べた。「自由連合新聞」第七七号から発行所を自由連合新聞社と明記した。タブロイド版四頁と形も改めた。発行署名人は木村英二郎。翌年一月の第八八号からは山口安二に替った。発行所も最初は京橋区木挽町（現在の中央区東銀座）から六月に四谷区南伊賀町（現在の新宿区左門町）に移ったが、此処には全国自連の事務所も移った。発行署名人が山口に替った時に、新聞社だけを麴町区内幸町（現在の千代田区内幸町）の中村ビルの階段の下の三角形の部屋へ移した。全国自連は浅草区橋場町三丁目（現在台東区橋場町二丁目）へ移り、一九三四年八月に神田区神保町（現在の千代田区神田神保町）に転じた。

連盟結成の準備段階と言ってもいいと思える全国自連から離れた自由連合新聞社の主張については、さきに述べたように革命団体結成を呼びかけていたが、連盟結成後、どのような新聞論調が現われたかについて記しておくことにする。

一月十日付第八八号にのった「組合戦線の整備と組織問題」のなかで、昨年の闘争の「最大の欠陥を組織の絶無及び組織的活動の未熟」にあったとし、では如何なる組織形態を持つべきかと問い、「吾々の組織を、自由社会に於いて考へらるべき原則によって束縛してはならないのである。もっと自由に、大胆に、吾々は吾々の組織を、闘争に於ける力と必要とから考察せねばならない」

と主張した。これは連盟結成に当って、私達が討議の前提として考えたことに他ならなかった。

六月五日付第九一号の「アナキスト団体に關連しての断片的考察」は、のちに党がまとめた第一号パンフレットと『プロレタリアの戦略戦術』を貫く基本的態度を示すものであった。「アナキスト団体を大衆団体の基礎の上に結成して行くことこそ当面の僕等の重要な任務なのだ」と言い、「アナキスト団体は、戦闘的アナキストの結集戦闘体でなくてはならない。戦闘的精神に燃えるやうな反逆の精神と、實際的に仕事を進める事務的才能とを持った人々の結集でなくてはならない」とし、「大衆団体のなかの最尖鋭分子の結集でなくてはならない」と主張している。

「アナキスト団体の戦略は最大多数の労働者農民を結集して資本家地主等の支配階級に対して決定的闘争に勝利すべく闘うことだから」「戦術として労働組合、その他の大衆組織の活動を採用あげ」るべきだとしている。

八月五日付第九三号には「前衛的運動者の態度に就いて」のなかで「吾等戦闘的アナキストは広汎なる大衆闘争の前衛として智力的啓蒙的暴力的闘争を大衆の中から盛上る政治的、経済的、日常闘争と結びつけ」ることを主張している。アナキストは前衛であると公然と主張することによって党は労働者農民の前衛であるとの主張を、党と言わずに示そうとし、党の組織拡大の活動を援けようとしたものであった。そして関東地方委員会の党員獲得活動は着々と進んでいた。

九月十五日付第九四号の主張欄の「組織に全力を傾注せよ」は、フラクション活動の強調であ

り、「戦線統一の気運に主動的立場を」は当時関東労働組合会議で提起されていた労働戦線の統一問題についての党の決定を述べたものであった。党フラクションを各派の労働組合の内部や、企業の中かに樹立することを先決として、戦線統一には積極的に活動すべきことを主張したのである。ただ党が未だアナキストの間にもその存在が秘密にされていたために、婉曲な言い廻しをしている。アナキスト団体を党と読みかえると明瞭になる。十月二十八日付第九五号の「全国自連への提言」も同じ趣旨を述べたものであった。そしてこの号には前に述べた党の行動綱領を明らかにしている。

翌一九三五年一月二十日付第九七号は主張欄に「緊急な問題」と題して、ファッショ的動向によって「或いは逃避し、脱落せんとする同志や、弛まんとする結合を強くするために、各個人が責任ある闘争の強化と友愛を以ってそうした事態を克服する」ことを声を大にして叫んでいる。これが当時のアナキズム運動の現実の姿であり、党はこの状況を克服するために努力を傾注していたのであるが、はかばかしい成果は得られなかった。二月二十八日付第九八号の「闘争の強化のために」も暗に党への参加を呼びかけている。

私の手許には、第九八号以後の新聞がないので、これ以上新聞論調を述べることができない。これらの新聞論調は、将来党が公然と姿を現わした時の一種の根柢であった。そして党参加者以外の同志のうちからも、アナキズム革命に過渡期の存在を認容し、一時的に革命勢力が権力を

把握することを認めるべきだという主張が現われたのである。山田健介が『黒馬車』(松尾正義発行)に発表した「変革期におけるアナキズム」がそれである。^(註10)

中央執行委員会で作成して最初に党が発表した文書は、さきに述べた論文であった。この論文の最初の個条書きの部分は、党の行動綱領と多少違っていた。行動綱領より項目が多くなっていたのである。これは山口の意見を容れたのであって、後に中執は承認した。

新聞の主張欄は、殆んど私と伊藤とが執筆した。

党中央部第一号パンフレットは、さきに述べたように関東地方委員会の要請によって作成することになったものであるが、原稿は私が書いた。脱稿すると私は関東地方委員会の討議にかけて、二、三の修正を加えた。その修正した原稿を中執で討議、決定したのである。活版印刷にしようかと思ったが内容が内容なのでガリ版にきめた。田所がガリ版を切り、印刷した。当時われわれのガリ版印刷の技術では、一枚の原紙で百部印刷するのが最高だったから、百部しか刷らなかった。これを黨員の他に、全国各地の同志のなかから選んで発送した。発送名簿は失われて今はない。そのなかの一部が特高の手に渡ったものと思われる。

発送は伊藤が担当した。このパンフレットの反響は遂にわからずに終わった。

これに続いて、自連新聞社で作っていたパンフ発行会から、『プロレタリアの戦略戦術』というパンフレットを合法的な形で発行した。もちろん直ちに発禁になった。これも党中執の討議を

経て発行したものであった。

『日本農業の諸状況』については先に述べた。以上が党が発行した文書の総てであった。

第一号パンフレットを発行した直後のことであった。茅場町の中外商業新聞社の前で、偶然、岩佐作太郎に会った。彼は私の顔を見ると、

「近頃、妙なパンフレットが出たが、全くくだらないものだ。あれはアナキズムではなくて、ボルド。君、読んだか？」とひどく憤慨していた。私はこれが旧来のアナキストの批判であろうと思つて平然と嘘をついた。

「未だ読んでいないので、読んでみましょう」と言つて別れた。私は家へ帰ると第二号パンフレットの原稿を書き出した。ロシア革命前のアナキズムは修正する必要があること、われわれの目的は人による人の搾取のない、それ故抑圧する機関のない社会を建設することであつて、先人アナキストの思想を実現するために運動しているのではないから、マルクス、レーニンの思想でも正しいものはこれを取り入れるべきだということ、革命に際してコミュニティを防衛し、権力主義者の国家建設の企図を打ち破るためにわれわれがヘゲモニーを把握するのであつて、権力主義者を圧倒しコミュニティとその連合が社会の運営を確立した時には自ら権力を廃棄するものだという主旨のものであった。書き終えると、直ちに原稿を田所に渡して、印刷を依頼した。しかし遂に発行出来なかった。田所が逮捕された時、彼はガリ版の原紙は切り終えていたが、印刷はしていな

かったからである。

これらの文書のうち、党の理論を解明したものは第一号パンフレットと『プロレタリアの戦略戦術』であつたから、これについて書いて置きたい。警察や裁判所では、表題がないこのパンフレットを第一章の表題をとつて、『最高の理想社会としての無政府』と呼んでいたが、あくまでもそれは便宜的な呼び方で、この表題は第一章の表題なのである。

当時、アナキズムは社会主義とは別の、何か特殊な思想体系であるかのような宣伝が一般化していた。そしてアナキズムとテロリズムとは不可分に結びついているかのようにさえ考えられていた。これは天皇制政府と国家を認める社会主義者——国家社会主義から、共産主義に至るまでの——とその諸政党との悪宣伝であつたが、真の社会主義は、人による人の搾取のない、それ故に搾取体制を維持するための国家権力のない社会を建設することが、同時に人類の解放、いいかえれば自主独立の個人の自由な連合によつて組織された社会の建設でなければならないとする思想であり、運動であるとの観点に立つて、アナキズムこそ真の社会主義であると主張した。そしてこの社会は、生産力の発展、資本主義の打倒、そして民衆の意識の变革という三つの条件なしには建設することはできない。マルクスは、アナキズムが現実建設することを主張している社会が建設された時、はじめて人類は解放されることを理解していた。そして生産力の発展に寄与した資本主義は発展することによつて内的矛盾のために必然的に崩壊する。バクーニンは、崩壊する

資本主義の総てを根底から破壊せよ、その時国家主義者の妨害さえなければ、人民の創造的建設がはじまる、と主張した。マルクスは資本主義が崩壊しても、生れ出た社会は資本主義の母斑を保持しているので、労働者階級が国家権力をその手に奪取する必要があり、ブルジョア階級を一掃することによつて、階級としての自己を否定し、それによつて国家は死滅する。それ故に彼は当面の課題は、国家権力を廃止することではなくて、プロレタリアートによつて旧国家体制を打倒して、新しい国家権力をプロレタリアートの手に奪取することにあると主張して、バクーニンと対立した。レーニンは『国家と革命』のなかで、資本主義から社会主義へ移行する過程についての展望を詳細に述べている。それはマルクスと同じく、国家の死滅を可能にする諸条件が成熟するまでは国家権力が必要であることを強調したものであつたが、国家権力の打倒が国家の消滅のための第一条件であることを理解してはいなかつた。そしてアナキストは長期に亘ると予想される過渡期を認めようとしなかつた。たしかにアナキストは、旧い国家権力が崩壊した後で新しい国家権力を組織している期間を過渡期というならば、過渡期に反対するのは当然であるから、これを認めることはできなかった。けれども旧い国家権力が崩壊し、混乱のなかから人民による下からの組織と建設がはじまり、それが社会に定着し、正常な運行が行われるまでを過渡期と呼ぶならば、アナキストはこれに反対する理由はない。ただこの過渡期に関する検討が三〇年代のアナキストによつてはほとんどなされていなかったことは事実であつた。

党はこの問題に答えて、人民の下からの経済建設を防衛するため、労働者と農民との同盟した武力をもった組織を組織することが、プロレタリア独裁国家建設のための勢力を打倒するために必要な措置であると主張した。党は資本主義国家権力を打倒した日から、プロレタリア独裁国家を建設しようとする企図がはじまることを予想し、これを武力的に潰滅させるための一切の手段をとるために、強固な中央集権組織に自らを結集し、訓練することを主張したのである。これらの闘争において勝利を獲得するためには、資本主義打倒のための闘争においても、国家主義的企図を圧倒するために、凡ゆる大衆運動のなかに党組織を確立し、大衆運動をゼネストや暴動などの革命的闘争へと盛り上げるために、計画的に活動しなくてはならぬと主張した。そして必要ならば、テロリズムも、党の計画的指導の下に遂行されるべきであると主張した。

革命に際して社会のヘゲモニーを把握した党は、人民の下からの経済建設と人民の自主管理による運営が社会に定着した時、自ら権力を廃棄する。これは権力を否定する思想以外には不可能であると主張した。

私は当時、この問題をどのように表現したらいいのか苦心したことを憶えている。これは不十分な理論の構築であったことも知っていた。そしてこれは今後、論議され、検討されて確立されることを希望していた。

これが中央部第一号パンフレットの骨子であった。

『プロレタリアの戦略戦術』は日本資本主義、日本の支配体制を分析し、これと如何に戦うべきか、革命への展望を持つべきかについて述べた。日本の支配体制を天皇制（これを絶対主義と表現した）独占資本主義、大土地所有制と規定し、天皇制は超階級的存在ではなく、大地主であり、大ブルジョアであるから、独占資本主義に対する闘争に重点を置くことによって、天皇制支配も崩壊し得ることを主張した。闘争の主体は、プロレタリアと貧農と中農との同盟であること、この基盤に立った前衛の指導が不可欠なこと、そして「来るべき革命における我々の主要な任務」は、「一、封建的残存支配の撤廃、二、大土地所有制の廃止、三、労働者農民に依る一切の生産管理」であり、このために集中的な煽動スローガンは、「帝国主義戦争に反対し、封建的残存官僚支配を廃止し、米と土地と自由のための、労働者農民の社会統制のための労働者農民及び人民一般の革命」でなくてはならないと主張した。

これが『プロレタリアの戦略戦術』の骨子であった。